



匿名批評にみる昭和文学史・小田切進編

大波小波

第4巻・1960-64

東京新聞出版局

大波小波

匿名批評にみる昭和文学史 — 4

昭和五十四年九月一日 第一刷印刷
昭和五十四年九月五日 第二刷発行

編者 小田切進
発行者 真野義人
発行所 東京新聞出版局

中日新聞東京
振替口座(東京)五一五四九七
〇三一四七一一二二一一(代表)
〇三一四七二一四四三四(直通)

電話

印刷 猪瀬印刷株式会社
製本 白信製本有限会社
© 1979 THE TOKYO SHIMBUN

目

次

1960

昭和三十五年

今年の文学の課題	元
年頭予想に物申す	元
週刊小説への抵抗	元
中野重治の鷗外論	元
不遇老作家の健闘	元
おとぼけ弥三郎	元
評論家と文学史家	元
文豪という名の濫用	元
竹内と荒の論争	元
匿名のステレオ	元
創造と批判の相違	元
平野謙の大失言	元
芸術院賞の人情味	元
椎名麟三の一戯作	元
少しうるさいぞ	元
岡本太郎の『詩人』	元
『瘦我慢の説』批判	元
下士官室の女士官	元
作家の文章の戒律	元
頭かくして何とやら	元
七百数十カ所の誤訳?	元

アラシ呼ぶ女流

“さん”付けはやめよ

国語問題に発言せよ

板ばさみの戦中派

「うやむや」の用語

同病同士の埴谷と鶴見

アクセサリー

小林の“文学信仰”

伊藤先生のワザあり

竹内好の抵抗の方法

おめでとう『三田文学』

青春づいた平野謙

お人よしの飛び入り

小説のなかの寓話

文芸家協会の政治行動

書評は走り人足か

運の悪い男・犬養健

武田泰淳と竹内好

時代物に手を出すな

明治期の大衆文学

平野謙の小説

文学における地方色

「戦後的小説ベスト5」

乞食俳人・路通の現代版

近代文学四派連立か

文学と政治の「敵」

徳富蘆花と嘉村磯多

犬養健の文学と政治

芸能化する文士

文学プローカーに一言

キーンの問題提出

文学教育の難しさ

大検察官・大西巨人

表現の自由の限界

大岡昇平の引き潮

文学賞とアンケート

伊藤整と新造語

正宗白鳥の秘密

大洋と第三の新人

鷗外の胸をかりて

日本のテロリスト

本多秋五の文学史

青柳瑞穂の発掘

文学賞のアナ

「挫折」と「俗物性」

シンのある座談会

『近代文学』よ若返れ

編集者の功績も

流行する「ながら病」

大俗物・小林秀雄論

平野謙さまへ

1961 — 昭和三十六年

プロ文学の系譜

河上の失言事件

橋爪健の文学回想

子供を救え

「牝犬神」の誤解

大岡昇平の革命観

サドは有罪か?

『声』の廃刊を悼む

若い作家の精神

十返と四十人の批評家

開高、大江の若い姿勢

文学と倫理の関係

女流作家の「個性」

佐藤春夫の「憂鬱」	八
文学作品の自律性	八
『死の棘』の受賞	八
恩給がほしい	八
"日本で考えたこと"	八
プライバシーの問題	八
国語審議会の改組	九
亡びしものは……	九
女秘書と菊池寛	九
『文学』の推理特集	九
文学学校のすすめ	九
名文と悪文	九
第十六次『新思潮』	九
むしろ和解すべし	九
中野重治と台湾	九
ホンをあげた平野探偵	九
平野と大井の符合	九
『のらくる』考	九
星新一の悲劇	九
太平ぼけ	一〇
調子づいた国語論	一〇
筋の説明とは	一〇

ある出版記念会	一一〇
奇怪な宣伝文句	一〇九
青野追悼号なし	一〇八
文学研究の条件	一〇七
外村繁の絶筆	一〇六
一知半解の批評家	一〇五
サド裁判の意味	一〇四
芸術は永遠か	一〇三
国破れた山河	一〇二
「会合魔」 中島健蔵	一〇一
『群像』の十五周年	一〇〇
春夫と光夫の論争	九九
大正時代の意味	九八
『試行』発足の意味	九七
ピンボケ文学観	九六
文学と政治	九五
戦後派の失敗	九四
二つの恐妻小説	九三
海外の日本文学	九二
外村繁の口述筆記	九一
文学の変質化	九〇
平井啓之の論文	八九

維新の再評価

国語教育斜陽論

「戦後」は終わらず

芸術院入りの人々

戦争下の文学

高見順の抗議

大衆芸術百選

中村真一郎の主張

1962——昭和三十七年

竜虎たかうか

羽仁五郎の復活

残すべき類句

プロ文学と政治

外来語とは

キモノと洋服

夢二のポエジー

批評家の物憶え

サドを裁く国

外國屋に物申す

初老組を驚かせ

ツバイクと片山

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

鳥外百年祭のために	三
文化交流の一面	一三
島尾敏雄の本懐	一三
もう一つの修羅	一三
小雑誌の任務	一三
政治性と文学賞	一三
ノーベル賞騒ぎ	一三
やはり文学者	一三
『新日文』に提案	一三
ピルロニストの死	一三
ロレンスの再検討	一三
荷風の生活の一面	一三
統制の中の抵抗意識	一三
芸術院賞と文壇	一三
知的「カミナリ族」	一三
名作「瘋癲老人日記」	一三
女を書かない小説	一三
論争のルール	一三
短編と批評家	一三
失われた手紙	一三
ネガティブ建築論	一三
ミゾを深めるだけ	一三

秋田雨雀を悼む	石川淳と無想庵
「白昼夢」の文学	裏目の作家
『不作法紳士』考	文庫本の画一主義
ケンカは署名で	大岡昇平の新意見
漱石旧居事件	漱石旧居事件
成功疑いなし	成功疑いなし
フォークナーを悼む	フォークナーを悼む
"サムライ"論争を	"サムライ"論争を
徴兵悲惨物語	横光利一の遺産
伊藤整の予見	伊藤整の予見
青野季吉の日記	青野季吉の日記
知識の切り売り	知識の切り売り
一つの異変	一つの異変
福永武彦の執念	福永武彦の執念
マル坊主の悲願	マル坊主の悲願
怨靈談義	怨靈談義
受賞第一作	受賞第一作

バカげた予断	吉川文学の再評価
一六三	歯に衣きせぬ良俗
一六四	北原武夫の批評
一六五	『円卓』の収穫
一六六	『のらくろ』の夢
一六七	文学碑の乱立
一六八	文芸雑誌の個性
一六九	蛇笏翁の逝去
一七〇	新人評論家の弱点
一七一	特殊性と普遍性
一七二	歴史小説と推理小説
一七三	戦争と作品
一七四	作家の覚悟
一七五	無罪になつたサド
一七六	説教問答
一七七	オリジナルの魅力
一七八	姿消した『少年クラブ』
一七九	もつと細心に
一八〇	朔太郎の可能性
一八一	責任・無責任時代
一八二	戦艦未来の城

正宗夫人の「病床日誌」

今年という年

貴重な手記

移り変わる言葉

1963

昭和三十八年

推理小説は花盛り

外人の志賀直哉観

野口の「秋声追跡」

小林秀雄と唯研

帰ってきた二人

『近代文学論争事典』

物故作家の再評価

二つの翻訳論

川端康成の爆発

「評論家」女史

手塚教授の文体論

文学よりも株を

平野謙の苦衷

瀬戸内の三冠賞

伊藤整の警告

吉本隆明の反骨

吉本隆明の反骨

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

九

八

七

六

五

四

三

二

一

〇

一

二

三

四

一九

一八

一七

一六

一五

島尾敏雄の評価	一四三
新しき情報産業	一四三
佐藤春夫の荷風論	一四三
木山の庶民精神	一四三
けなげな小雑誌	一四三
マトモな文学感覚	一四三
つむじまがり	一四三
幸福な家庭小説を	一四三
野間宏の判断	一四三
「忍月の金沢時代」	一四三
再び久保田万太郎	一四三
批評の基準	一四三
荷風の日記と人物	一四三
さまざま芭蕉	一四三
批評家の態度	一四三
文学の危機意識	一四三
傍観者の眼	一四三
橋本多佳子追悼	一四三
推理小説壇の常識	一四三
長谷川伸の仕事	一四三
理論と好みの違い	一四三
通人の隠語	一四三

妻の二つの型	一〇九
茂吉の愛の手紙	一一〇
ピープスの日記	一一一
戦後派三巨头会談	一一二
戦後文学の図式	一一三
主婦の感覚	一一四
紳士になった文士	一一五
サドの控訴審	一一六
散華の精神	一一七
文學者の軍隊歴	一一八
木山のマグモの	一一九
「流行作家夫人」	一二〇
本多秋五の背骨	一二一
美しき愚論	一二二
論争再開の機熟す	一二三
ぶりがな問題	一二四
吉川の「虚構と事実」	一二五
新しい文芸評論家	一二六
文学と現実	一二七
作家の「生産計画」	一二八
二周年迎えた『試行』	一二九
日本文壇白書	一二三